

途上国って、国際協力って何だろう？

「お腹が痛い！ここに病院はないの？」

「川に水くみに行かなくや」
「今からお祈りの時間だよ」

夏休みも終盤を迎えた8月下旬。アフリカの民族衣装を身にまとった人たちが、何やら、真剣な表情で話をしている。室内であるはずなのに、しったり落ちてくる汗。まるで、灼熱の大地に立っているかのような暑さだ。しかし、まぎれもなくここは日本、JICA九州国際センター（福岡県北九州市）の一室である。

彼らの姿を前に、少し困惑した表情を見せるのは地元の高中生たち。西ア

フリカの名産、ハイビスカスのジュースを飲みながら、目の前で繰り広げられるやり取りにくぎ付けになっている。「学校に行けない子もいるなんて…」

ピンと空気が張り詰める。

「さあ、今度は涼しい所でディスカッションをしましょう！」

司会の国際協力推進員（以下、推進員）

※1の言葉に、一同がほっとした表情になる。クーラーのスイッチが入ると、一気に涼しい空気が流れてきた。すべては、アフリカを再現するための演出。JICA九州の「高校生国際協力実践プログラム」のひとつこまだ。



九州の高校生発！アフリカを元気にするプロジェクト

学校の枠を超えて、高校生が世界の問題について考える。今年も夏もJICAは全国の国内機関で「高校生国際協力実践プログラム」を実施。未来の国際協力の担い手たちが、世界に向けて新たな一歩を踏み出した。



民族衣装を着た推進員たちが、高校生を巻き込んでニジェールを再現。体感することで、途上国がより身近なものになった



(上) JICAニジェール事務所とテレビ会議を実施。事務所スタッフや協力隊員から、現地の生の声を聞くことができた
(下) 初日にはJICA研修員とも交流。お互いの国について紹介し合った

JICAの国内機関では毎年夏休みに、学生を対象にしたイベントを数多く開催。JICA九州にも、8月18〜20日、九州圏内の7つの高校、28人の高校生が集った。「途上国のことをもっと知りたくて」「いろいろな学校の人と話してみたい」「青年海外協力隊に興味がある」など参加動機はさまざま。

「今、皆さんに体験してもらったのは、ニジェールという国の気候です。50度を超えることもあるんですよ」と鹿児島県の推進員を務める力竹貴子さん。ニジェールの元協力隊員だ。

猛暑といわれる日本でも、さすがに

50度までいくと未知の世界。各テーブルに配られた現地の写真を見ながら、思い思いに想像をふくらませる。「私たちがとって当たり前のことが、ここではまったく通じないんですね」と、鹿児島県情報高等学校の森文香さん。「まずは、違いを知る事が大切なんじゃないかな」。そんな彼女の言葉に、皆、深くうなずいていた。

青年海外協力隊になって村の人と共に動き出そう

まだ見ぬアフリカ大陸に思いをはせながら、ニジェールについて学んだ高

中生たち。次に、推進員から新たなお題が出された。

「青年海外協力隊として、ニジェールのサイ村に派遣されまして。あなたは村落開発普及員※2。グループごとに活動計画を立ててください」

活動の条件は、

村の問題解決につながることで、そして協力隊員がいなくなっても、村人の手で継続できる、持続性があること。村長、学校の先生、農民、医者、警察官、子ども…。さまざまな人を巻き込んでいかなければならない。

「羊飼いがたくさんいるから、羊の毛を使って何かできないかな」「子どもたちが学校に行けるようにしたい」「ごみをリサイクルして何か販売できれば、生活も豊かになるよ」。頭を抱えながら、夜遅くまで議論は続いた。

そして最終日の朝、サイ村プロジェクトの発表会が行われた。「鹿児島の特産品さつまいもを栽培して食料不足を解決」「石けんを普及して衛生状況を改善」「ろ過装置を作って水をきれいにする」「情操教育に野菜づくりを」。発表者以外は、村人として話を聞く。「その道具を作るお金はくれるんですか？」

「あなたがずっとやってよ」。少しイジワルな質問を投げ掛けられても、「一緒に頑張りましょう！」と懸命に訴える姿が印象的だった。

「言葉が通じなくても、国と国がつながって、信頼し合うことが大切。このプログラムに参加して、国際協力が少し身近になりました」と福岡県立福岡高等学校の乙藤有里さん。熊本県立矢部高等学校の鞭馬勇真くんも「みんなの想像力を合わせれば、どんなことでもできるような気がします」と力強く話してくれた。

プログラムの最後、一カ月後の自分に手紙を書いた参加者たち。「この3日間で感じたことを忘れずに、家族や友達に伝えていきたい」そんな強い思いを胸に、国際協力の「プレーヤー」として、それぞれの学校で新たな一歩を踏み出している。



(上) 青年海外協力隊になったつもりで、ニジェールでの活動内容を考える参加者たち。3日間のプログラムを通じて、参加者たちの間にも新たな気づきが生まれていた
(下) 最終日には活動計画を発表。どのグループも、夜遅くまでポスター作成に励んでいた

※1 各都道府県の国際交流協会などに配置。青年海外協力隊OB/OGなどが開発途上国での活動経験を生かし、各地域で市民レベルの国際協力をサポートしている。
※2 青年海外協力隊の職種の一つ。住民と共に地域の問題を掘り起こし、持続可能な解決策を探っていく。